現地通信

フィリピンの熱帯材

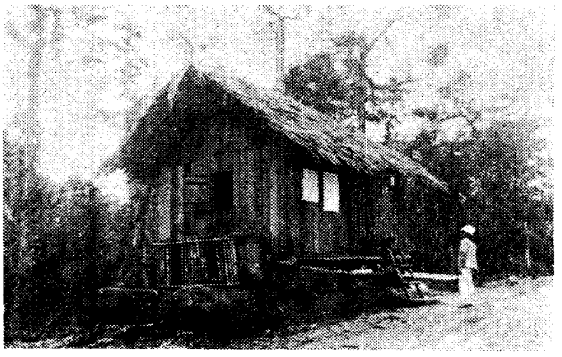
佐　藤　　惺

1978年10月下旬，筆者は「未利用林産物の化学的利用」への基礎調査を目的としてフィリピンと香港（帰途）へ向かった。ほとんどの日時をミンダナオ島で調査と見学に過ごしたが，当初に参加したIUFRO（国際林業機関連合）主催の「熱帯材の品質と利用」に関する国際会議はおおよそ1週間におよぶ研究発表，討論とともに見学旅行（南部ルソン，ミンダナオ）を含めて，事後の調査にも非常に役立った。

この会議はロスバニヨスの同国林産試験所で開催されたが，同所職員のコーラスに始まり，同じくコーラスで閉じるまで専門会議の余暇をぬって民族舞踊，ダンスパーティーが催され実にホスピタリティーに富んだもので，まさに同国人の国民性の一端をみる気がした。

南部ルソンの樹木の主体はココヤシであり，山頂まで埋めつくした景観にはびっくりするが，すでにその多くは経済年令を過ぎており，樹木の更新と廃材の利用はココナツ廃棄物とともに大きな問題となっている。一方，政府の植林推奨木にGiant Ipil-ipil（*Leucanea latisiliqua*）があり，マニラの並木の一部にもみられるが，これはミラクルトリーと称せられ盛んに植え付けがすすめられている。実際には土地の酸性度などの理由で，さほど普及しているようにもみえなかった。因みにこの木の特徴は生長が早く（5年で20メートル高），荒廃地の緑化樹，砂防用，並木用，肥料木（葉），家畜飼料，薪炭材，パーティクルボードといった多目的な点が買われている。

現在，同国の木材工業はミンダナオ島に集中しているが，その多くは日本製の機械を使い，ラワンに代表されるフタバガキ科の樹木を選択利用して単板にむき合板製造をしている。これら比較的大径木のラワン類も資源的に数年で底がみえようかというのに，3交代作業をやってるのには驚いたが，これはボイラーの都合による由であった。また同国の国樹ともなっているローズウッドも乏しくなったので，新たにフィリピンローズと称してツーグ（Toog）材（ゴバンノアシ科）を保護伐採している。



伐採地現場事務所（修羅か？）＝東ミンダナオ山地で

ダバオ，ビスリグ，セブと数カ所の工場，林地を見学後，再びマニラからスリガオ（ミンダナオ東北端）に飛び，現地G社の好意により同社の工場，林地で1週間余りを過ごした。必要な材鑑，試料を集めるため伐採地深く入り込み，望みの立木をチェンソーで伐り倒し試料を得たが大部分の残材は林地に放置し，もったいないと思っている。この途中，従業員がネイティブと呼んでいる山岳部族民に会ったり，伐採現場事務所に日本でも一時騒がれた「修羅」が活用されていたり（写真）興味を惹くことが多かった。その他，この付近では数種の薬用植物を採取した。

現在持ち帰った試料について化学的分析を重ねているが，フタバガキ科といえども化学的性質の差異の大きいのはびっくりするくらいである。

香港では林産物と生薬店の実情や流通様式を理解しようとしたが，その余りにも複雑な内容に途中で断念し，数種の試料を購入したに留まった。

調査旅行を通じて得た多くの友情，美しいダバオ，平和に満ちた東ミンダナオの部落の生活，戦前・戦後を通じての日本人との関わり合い，農林業の実情など，ますますこの国に惹き戻される何かを感ずるようなこのごろである。

（京都大学木材研究所助教授）